

上中同窓會報

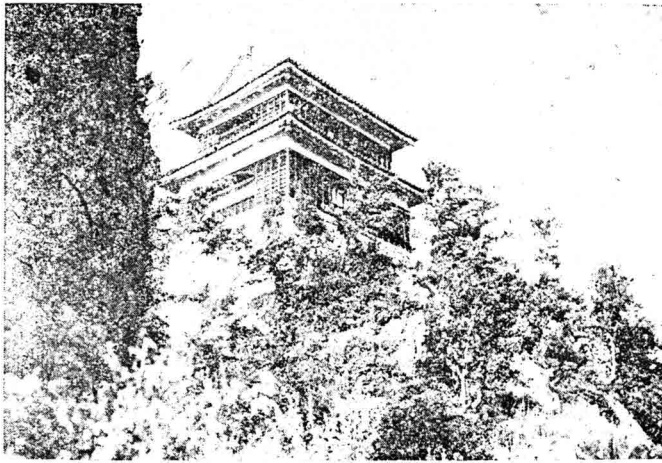
【創刊號】

發行所 上田中學校同窓會
長野縣上田市新町
電話 二〇〇
編輯 田中 貞
印刷 中澤印刷株式會社

今や、新時代へ

胎動せんとする

我等が古城



秋玲瓏の空衝きて

ゆうべ太郎の嶺高し

春縹渺の末けむる

あした千曲の水長し

創刊の言葉

副會長

林 貞 三

幾度か希望され、提案され、計畫され、もした會報の發刊は今日まで遂に實現されず、僅かに校友會報を利用したり、名簿の發行にお茶を濁して来た。一に資金の見透しがつかなく、二に資金の調達しづかなく、三に紙の入手難の上に、驚くべき巨額の資金を要し、考へてみようともしなかつたのに、過ぐる幹事會に於いて資金はなくとも方法があるやつてけよう。任せて欲しい。と若い盛り上る熱の結晶に會い、一も二もなく老骨幹部は頭を下げてしまつた。蓋し、上中同窓會も時の光を浴びて若返りつゝあることを物語るものである。幸に本會報に依り、會員相交の連絡を密にし、母校の復興に寄與せんことを期待して各位の御援助を切にお願い申し上げる。

同窓會員に捧ぐ

校長 北島修一郎

我國教育制度の劃期的改革に伴い、本校も獨立四十九年の中學校としての輝かしき歴史を閉じ、更に新制高等學校として力強い發足をする事になった。この秋に當り同窓會報第一號を同窓の先輩に贈り得るに至つたことは大きな喜びである。

思うに本校がその組織と内容とに於て、全國有数の大校となり、中學校として信州第一生徒數を持ち、過去に於ける優れた傳統に於いて天下に誇るものを持ち六千有餘の俊秀を中央地方の各界層に送り、東信地方文化の温床として、人材の基盤として今日まで國家社會に盡して来た功績は誠に偉大なるものありと言わねばならない。

偶々一昨年中二回に亘る祝賀の災禍を蒙り、建物と設備の大半を喪失し去り、職員生徒を極度の混亂に陥れ、彼等より希望と誇りとを奪ひ、教育の權威を弱めたことは大きな不幸であつた。

私が前任地廣島文理大、高師の復興途上にして任を去り、郷里の子弟教養に大きな使命と喜びを感じ本校に來任したのは昨年五月中旬のことであつたが、荒廢せる母校の有様には誠に胸の痛むものを感じたのであつた。然しながら史に傳へる曾有の戰災を受けた廣島でさえ、原子沙漠の眞只中より教育は復興されつゝあり自分も及ばずながら學園の再建に犬馬の勞を捧げた経験を生かすならば、上中の復興敢て意とすに足らずと感じたのであつた。要は熱と創意と至誠と、人の和とに依る總力の結集にあり自力復興に依つて轉禍爲福の實を擧ぐる、敢て至難に非ずと信じて、物心兩面の教育再建を目指して、使命實現の第一歩を踏み出したのであつた。爾來席暖まる暇もなく、各種の復興の會合を開くこと十數回、各地の同窓會支部の會合、父兄懇談會等に出席すること六十餘回、母校復興の全貌と新教育の實際を語り、母校の現状と今後の構想を明らかにし、大方の高見を率直に聞き、胸襟を開いて語り合ひ、母校復興に對する希望や指針を強く與えられたことは最も大きな收穫であつた。この間昨年の夏休には、予算もなくして焼残り校舎九百餘坪の大修理も敢行し、第一期三百八十坪十教室も十二月には落成して木の香新しき教室に半數近くの生徒を收容し得るに至り、舊校舎も立派に修復出來て、日常の授業には事缺かぬまでに至つた。これらは全く先輩の大きな力と援助の賜であつた。自力復興運動も漸く軌道に乗り、施設設備の充實に伴い、精神復興も次第にその緒につき生徒の研究意欲の向上と校風の刷新も漸く舊態に復し得るに至つた。

この間、母校學園再建の事業を通じて與えられた同窓先輩の理解と協力と同情と援助とに對して、私は万腔の感謝を捧げると共に、青春五十年の思出を秘めた母校に對する先輩各位の愛着と關心の深さに對して衷心感激措かぬものであり、同時に自己の責任のいよいよ大きく不徳非才、力の足らざるを備えに恐るゝものである。

思うに祖國の再建、民族の復興に培う教育の民主化は大きな世紀の課題であるそれが實現の第一歩は、教育に對する國民の熱意と關心を高め、率直に世論を反映して教育の實踐につとめるにありと信ずる。このために母校の教育運営に對して同窓の總意と力を一途に結集することは最も肝要であり、時世に即した學校發展の方途であり眼目である。此の校に學んだ同窓六千の意志と風格と母校愛の精神とを如實に反響せしめ確固たるその組織力を活用することを工夫せねばならぬ。忠實にこの方策に行われさえするならば、それは後輩の大きな指導力となり、母校復興の如きは易々たるものであり、同窓會の發展又期して待つべきである。大きな團結の力と高邁な傳統の精神とは比しなき教育力となつて作用する。

現在同窓會の事業として計畫され實踐されつゝある母校の復興援助、名簿の編纂に依る、相互の連絡の強化、會報の發行、校友會部室の改造に依る同窓會館の設立、先輩の生徒激勵會、各地の支部結成に依る母校との連絡の緊密化などは何れもこの線に沿うものであり、同窓意識の強化ともなり、母校教育の發展に大きな寄與となるものである。

此所に職を奉ずる五十名の教職員と此所に學ぶ千三百五十名の生徒とは、偏に先輩の指針と嚮導を熱望する大きな組織の力は社會的に極めて重要な存在と意義とを持つ、地方文化の進展、政治、經濟、産業の發展等にも大きな力となつて反響するであらうし、又然からしめねばならないと信ずる。

今や新春を迎えて、母校は新制高等學校として更に一大飛躍の時機に際會している。この秋に當り本會報の發刊は、同窓會進展の高き旗幟として極めて意義深く、且その將來に對する大きな祝福であり、私の衷心欣懷に堪えない所である。松尾城下に育つた上中

魂の大樹はいよ／＼その茂みを深め亭々として天を摩し、以て母校復興の我等が悲願に一大光明を與えられんことを祈つてやまない。私も亦微力その任に非ざるを憂えつゝも、渾身の力を傾けて自己の使命達成に邁進し、以て各位の御期待に副い、御熱意に報いるべく心私かに期している。願わくば微衷を諒得せられんことを。

御挨拶

前校長 上田 義雄

同窓會各位 此の度の同窓會誌の創刊を機會に、餘白を拜借して一言御挨拶申上げます。小生昭和十七年五月、歸らずも各位の母校に職を奉じましてから爾來五十年、殆んど戦争を終始し、其の間、微力無爲今更生徒教育の責任を痛感致して居ります。しかのみならず、再三不慮の火災により貴重なる校舎や圖書を焼失し、さなきだに困難な戦後の教育を一層困惑せしめましたことは、誠に申譯なく恐縮致して居ります。然るにも拘らず昨年三月退職に際しては御鄭重なる饒別を辱うし、且又病臥の身に御手厚き御同情を拜し唯々感激致して居ります。御蔭を以て混沌たる世相を他所に、安臥一年有餘、病氣も漸く衰え、再起の日も

とを。最後に東京、横濱を始め各地支部の會合にお招きを受け、各位と膝つき合わせ胸臆を吐露しての懇談を賜わり、格別の歡待と厚遇を添うした御芳情に對して衷心より感謝を捧げる次第である。

(昭和二十三年 二月十二日記)

(昭和二十三年 二月十一日)

上中回顧

1 回 小 泉 清 見

故山春秋

8 回 峯村 國一

明治三十年私が長野縣尋常時二年生の依田英一氏が常中學校上田支校の一年生運動場の片隅で野球の話をかへりきて眞向ふ秋の山の色のすでに深きに涙落ちくる。ふるさとの小富士の山のもみぢ葉を無残に見つつ今日も稻刈る。わかれ來しかの東京の友の顔疲れてねむる夜も夢に見ゆ。しぐれくる小雪の窓に打つ響の肚心にひびき力とぞなる。雪凍る畑にわが撒く初肥し山の朝日子頻に照るなり。北風の荒きいく日も過ぎけらし山にかすかに霞たなびく。向山の北の谷間に昨日まで見えし雪さへ消えはてにけり。穂をはらむ裏山畑の青麥に聲鳴きやめて雲雀隠るる。かへりきてすでに一とせ山川のあらし濡ちに身を委ねつる。麥を刈る鎌の刃先に見えてくるをちこちのわが友の顔ばせ。蟬の聲しばらく絶えてきこゆるは谷の流れか深き木の間に風の聲聴けばはつかにきこえる野の寂けさをひとり愉しむ。

の初秋頃だつたと思うが主事(支那の最上席)寺嶋傳手とを用いて野球を練習し右衛門(五、諏訪出身)にては勧められた。これが

發端で野球が長野縣のトップを切つて上中に人れられた。依田英一氏がマネージャー兼投手櫻井彌一郎君が遊撃だつた。當時一、二年生は和服で袴を着け、三年生はなると兵式体操を課せられる規定であつたからホック掛け詰の洋服と靴を履いた。もとも金のある家庭の子息は下級時代から着靴したのもあつた。袴を短かく着け紺の脚絆をつけて敏捷に走り廻つた櫻井君の姿が眼の前に浮んで來る。當時の上中生は一般に兵児帯を太く巻き其上に袴書を短かく着け下駄履で教科書を頸に縛りつけ大きな辨當箱を胸の前にぶら下げて讀書しながら大股に通學したものである。そして遠きは坂城町、縣村、田中、別所、青木村、殿戸から通學した。後島慶太氏は殿戸から通われた人である。翌年五月頃でしたか劍師横田地禮次郎、布施千次郎兩先生弓師立立基義、神尾成教兩先生を招聘してそれ／＼劍術部、弓術部を創設した。以上三部は月額十錢の校友會費で、賄われたのであつた。此の頃上京修學の先輩有志同窓生の會合を公園内明倫堂(今の富貴)に催した。東京下りの演述、講談眞似、道化等々演じて誠に愉快なるものであつた。これが上級校志望の熱を煽つた。明治三十三年二月宮本右次先生が長野上田中學校の初代校長として御赴任

弟

26 回 村上 勇平

戰の果てしより便り断ちてゐし弟はソ聯より便り寄せ來つ。戰犯者か戰死かとの思ひみし弟の便りソ聯よりとどく。ソ聯より弟が寄せし郵便は健かにのび伸び記し來れり。

十八年前勤めし學校の前を過ぎ見おぼえのある塔もなつかし。(南佐久野澤町)青年に交り野球に身をやつしし記憶もこの町に來て生々し。てきばきと應答しる君を圍みて村の誰彼の顔嗜々し。(傳田精爾先生)

設立を見たけれど上中には未だそれがなかった。此の上中四回の卒業生で十九銀行(八十二銀行の前身)の重役黒澤利重君外有志が同銀行に會合して上中俱樂部を組織した。これに刺戟されて上中同窓會設立の議が起つて來た。其の結果黒澤君外一、二の有志が柳澤文三郎君(現柳澤病院院長の父君)を訪問して其の意見を聞いたのが我が上中同窓會設立の端緒である。當時世に多くの中等學校同窓會はともすると學校當局に頼つく嫌があつたので校長は積極的には設立援助を躊躇する傾向があつたが、佐々木校長は斷然設立促進を援

助された。これによつて昭和元年九月五日母校に創立總會が開催され會長に柳澤文三郎君、副會長に黒澤利重君、瀧澤助右衛門の兩君以下役員が選任され會則其の他諸般の決議を得たのである。本會の目的的特質は、「會員相互の親睦を謀り兼ねて母校を援助する」にあるのである。由來今日に至る迄その信條を確守して進んでゐる。本會の學校援助の業績は數々あるけれど皆會長柳澤文三郎君の指導努力に待つものが多い。柳澤黒澤、瀧澤の三君は己に故人となられておる。合掌してこの稿を終る。

わが追憶を語る

13回 醫學博士 宮入清四郎

いまにしてみれば、追憶もまた懐しい思い出の一つである。第一高等學校在學中の事であつた。午後十一時、消燈時間、各寄宿舎は一齊に闇に還る。林のよけに静寂に還る。しかた仔細に部屋を點檢してみたら、中はにジイジイといふ本のローソクが燃えて、仄かな光が部屋の隅を照らしその光をたよりに、どてら

をひつかぶつて一心に机へ嚙りついてゐる學生が多く發見された。これを、ローソクの光で勉強するからローベンと言つてゐた。

そのうちに寄宿舎の長い廊下の遠方から、闇の静寂を破つて、荒々しい足音が、だん／＼近くなり、手に手に竹刀やバットを持つて筋骨たくましい亂暴者があはれにこゝろへ、何だ青年の癖に本にばかりしがみついて爺臭いぞ。大いに浩然の氣を言つては、このローベンを邪魔して廻つた學生もいた。これを嵐と言つた。

私はローベン組の一人だつた。その當時は無試験入學の制度があつて、中學時代に成績のよい者は、校長の推薦によつて、この特典に浴せ、たもので、全國から少なからざる特典組の學生が入學していた。私も上中を出るとの特典によつて、入學した一人であつた。なにしろ天下の秀才が一高を目指して雲集し、激烈な難関を見事パスして來た連中の間に伍してゆくのだから少しも怠けると忽ち學年試験の成績に影響する。若しも、試験入學者に後れをとるような事があつたら自分か恥をかかばかりでなく、母校の名を汚す。それで母校の爲に校長先生方のために重大なる責任を感じてゐたのである。こんな具合でローベン組の一人となつて、吉田松陰先生の、「倒れて後やむ」と言う氣概で、消燈後も一心不乱になつて勉強した。時にはストームを避けて令監室で勉強した事もある。大抵一日に二、三時間しか寝られなかつた。寒い時などはこれがために風邪をひいたりして四十度の熱が出た事もあつたが、なほ、病氣ぐらゐは精神の持ち方ひとつで癒るものだとばかりにこの高熱をおさえて寄宿舎の水風呂に入つて冷水擦磨の荒療治をやつて頭張りもした。だが、此あまりにも常軌を逸した頑張りで、とうとう胸を患ふようになりその上に、神経衰弱におち入り、醫者からは常分の間

は絶対に學業を中止せよと厳命され、張り切つてゐた心持は、空氣を抜いた風船は、極めて元氣でござい、かくて、一高時代三年間

玉のように萎んでしまつた。この頃から私には、人生問題に悩む事が多くなつた。人生とは何ぞや。と言うような考に頭を突込んで、上野圖書館通いを始め、古今東西の修養書は大いに讀破したものである。更に岡田式靜坐法や、藤田靈齋氏の呼吸法なども研究した。中でも岡田氏には心をひかれて、晴三時頃、寄宿舎を抜け出して、その頃は一面の田圃だつた坂を走り、日暮里の道場に至つて五時から七時まで靜坐した。しかして教えられたものは、外界の雜事に心を動かされるな、という事であつた。これは心身の健康に餘程の効果があるように思つたが、未だに懷疑主義のモヤ／＼とした雲が頭の中に湧き上るばかりで、心の不安動搖は治るべくもなかつた。

更に東京帝國大學へ進み、四年半、徴兵検査で甲種合格となり、麻布第三聯隊に一年志願兵として入營。一年四ヵ月、更に東大病理學教室で、上田出身の癌の世界的權威山極勝三郎先生の指導で一般病理學を研究し、更に稲田内科に入り、稲田博士指導の下に、内科學約七年研究し、都立深川病院創立と共に副院長として赴任、研究と臨床學の方面に至り研鑽を重ね、院長として指導診療の時を過ぎ、罹災する迄勤勞してゐたのである。私の學生時代は上中出身の一高と東大生及び先輩の大高會と言ふのがあつて、年に數回江知勝、豐國または神田の今文などで、數十人會合して大いに上中の息を發揮したものである。その後暫く中絶の止むなきに至り、誠

創刊に寄せて

14回 久保田正三

多年の懸案であつた同窓會報を茲に創刊して六千同窓諸兄と母校との連絡を取りますことは、手掛りを見出すこと、確たる復興と新制高校へのスタートという大仕事を控へてゐる母校としては、この上もない重要な企ての一として考えられます。

由來、中學校はその性質上餘程特殊な私立のものでない限り、一般に卒業生と母校との結びつきが稀薄であることも常態として來た様でありますけれど、其の實、中學校の生徒程その先輩の行動と實績を見守るものは他にはないものであります。それは諸兄自らの中學時代の憧憬を追想して見れば一番よくお解りのゆくことと存じます。それにも拘らずひとたび母校を出れば、それこそ何年にも一度も再び母校をくぐることもないの

よりよき大代の國民を造るの國民全体の責任であります。ましてこの混亂の渦中に立つて前途に確乎たる希望や憧憬さえも持ちにくい現代の青少年に對して而も國家は再建の重責を負わせようとしてゐるのあります。事實彼等に俟たずして敗戦日本の再建はあり得ないのでありますから、今の日本にとつては何時の時

近 詠

20回 遠藤恭介

眞夜中の停電の街を往診し連續二十四時間勞働とひとりつぶやく執拗に繰返さるる停電に今宵はいねず讀みつがむと思ふ。三日前粉雪の舞ひしこの坂に春の夕日はあわ

に遺憾この上なく思つて居りました。それが今回、上中復興計畫を機に、上中出身者に會合の機会を得て、上中會を盛大に計畫されるようになったことは、何にても喜ばしい限りである。この際大いに上中出身者、並びに上中生徒諸君の奮起を促したい。

昭和二十二年十二月二十二日

戦後一ヶ年の二十一年八月十五日、郷里へ引揚げて参りました。そして昨年十一月一日より母校に勤務する事となり、唯今郷黨の子弟のために教鞭をとつて居ります。今後何卒よろしくお願致します。

數日おくれて十四期卒の久保田正三氏（前東亜同文書院教授）が來任せられ、唯今母校では同窓職員が十三名ということになりました。上中同窓會名簿は昭和十五年に調製されたまゝで、大東亞戰爭となり、名簿に於ても亦未曾有の大變動を來した譯であります。外地よりの引揚、復員、大中都市居住者の轉任、疎開等で昭和十五年調製名簿は過半數の異動を生じている有様です。今春より母校は高等學校ということになりますので、此の際上田中學校同窓會員名簿を完成して置く

精進致している譯であります。そこで昨年來全校生徒を動員して、會員の異動調査を致し、唯今大部分の調査訂正を済ませました。但、何分大變動のあとでありますので、どうしても調べのつかない「カード」が未だに相當多數にのぼる有様で、閉口して居ります。もう一奮發して更に不明、不備の分を出来るだけ調査致し、可及的完全に近いものとして今年は是非とも名簿を發行し、會員諸君の御手許にお送りし、會員相互の連絡、協力、親睦等の爲に役立て、艱き同窓職員としての我々責任の一端を果したいものと念願いたしている次第であります。何分御協力をお願いします。

そこで、昭和十五年以後異動のありました同窓會員及昭和十五年の名簿に不備誤謬のあります會員諸君は

勿論、その様な諸君を御存知の方は、御協力を願います。特に、同期卒業、同郷其他個人關係で引揚者、職災者等の會員で、東京其の他府縣へ異動された方を御存知の諸君はお知らせを願いたいと存じます。この様に會員全員の協力により出来るだけ正産を期し名簿調製のために聞きたい念願であります。宛名は上田中學校名簿係、竹内敬太郎、高柳厚宛に願います。(19回・高柳厚)

在校生として

五年生 小山 邦明

同窓會報を創刊するに當り、在校生と致しまして聊か愚感を述べて戴きたいと存じます。

新校舎の落成を見ましたことは、校長先生始め諸先生及び先輩各位の並々な御盡力の賜と、在校生一同大いに感謝致して居ります。敗戦以來二ケ年有半、年月は流れても今尙國民は缺乏と困苦の中に喘ぎ、一身の安きを貪らんとする飽くなき利己心に汲々たる人心の動き亦端睨すべからず、狂暴闇黒の海面に一闪救済の光を放つべき燈台の光も今は殆んど滅してその正しきを見失う程であります。然し乍らかかる道徳的頹廢と經濟的貧乏のために行きづまれる祖國に、我等は立ちてその眞理探求の良心を結集し、赤々と燈火を點ずるに非ずんばあらず、こそ其の責を痛感致している次第であります。多難を豫想される新學制の發足と共に、

上 中 同 窓 會

會長 甲 田 作 衛
副會長 林 貞 三 衛
副會長 伊 藤 兵 衛

評議員氏名

【上田市】

○伊藤 源平 ○池田 宗武
宮坂 陽 佐々木卓一
中澤 二郎 小林 象平
石塚 生 長峰時次郎
細川 清 水野 鼎藏
八木 誠政 三吉 敬藏
○小山 昌造 上野 勝美
○羽田 武邦 佐藤 信輝
花岡 數幸 ○依田 誠

早春

8回 石塚文鳥
早春のぬかるみさけて掃きし庭
早春の雪の鳥帽子の窓をあけ
早春の風おさまりて四山暮る

- | | | | | | |
|---|---|---|---|--|--|
| 三井 祐三 成澤 省三
山寺 豐一 安藤 守正
小島 尚二 松井 修
島田 甲子三 山崎 武三郎
濱村 謙一郎 齋藤 嘉六
○高柳 厚 ○竹内 敬太郎
○岩下 三千穂 ○山極 眞平
○金子 憲行 ○尾崎 毅
○林 四郎 ○齋藤 芳郎
○依田 和俊 ○村田 宜雄 | 【小縣郡】
滋野 村 藤多 寺島 嘉文
柳津 村 拾 清水 和衛
高橋 早見 清水 和衛
柳橋 透
○縣 村 小十 萩原 二郎
○小林 宜孝
○大熊 彦衛 小林 小金吾
和 村 彦衛
兒玉 彦衛
竹内 丈夫
○神川 村 富則 ○竹内 馨
○西澤 富則 山浦 國久
尾崎 一雄
塩川 村 龍澤 信男
横山 善一郎
○依田 篤
松田 村 萬平 吉池 篤見
田村 修作
龍澤 修作
久保田 昌人 櫻井 隆夫
白井 美明
丸子 町 翠川 廣一
四方 林 小林 啓郷
齋藤 寅太郎 小林 有郷
川合 久午 小藤 芳夫
工藤 芳夫
東内 村 小山 田 仁
澤山 金平 | 西内 村 龍澤 藤一郎 久藤 博邦
上野 徹玄
武石 村 義雄 橋詰 六郎
牛山 義雄
伊藤 至
長峯 古町 君川 正近
星野 門三郎
翠野 門三郎
長久保 新町 小池 就
和 村 石合 祐次 長井 謙三
大門 村 長井 新藏
宮坂 周夫 佐藤 博
佐藤 武雄
坂口 吉十郎 清水 袈裟繁
坂口 貫吾
○三井 英一郎 坂口 讓
半田 東平
本原 村 赤木 宜堂 松井 照好
横澤 理
○豐里 村 久保田 正三 細田 延一郎
○久保田 正三
上野 高寛 金子 二郎
神村 逸雲 清水 宗作
小林 嘉幸 茅野 功
清水 嘉幸 茅野 功
塚原 忠雄
川邊 村 飯島 杏學 山浦 厚
泉 村 石井 榮一 小泉 清明
宮島 陽一
浦里 村 田中 信義 池田 英雄
堀 謙治
室賀 村 白鳥 修一 | 青木 村 倉掛 嘉助 宮原 榮吉
金井 通次郎
東塩田 村 村山 兼人 横關 正中
丸山 寛 關 勇春
中鹽田 村 村内 直 若林 益夫
村上 勇平
富士 山村 工藤 教平 峰村 國一
西澤 軍平
西鹽田 村 武田 助左衛門 武田 保雄
黒坂 周平 山極 正之
別所 村 南條 泰三 若林 順天
半田 孝淳
塩尻 村 佐藤 辰雄 母袋 良平
工藤 巖 梅原 道太
母袋 忠右衛門 | 【北佐久郡】
小諸 町 大塚 宗八郎 塩川 清兵衛
掛川 恒二郎 花岡 虎雄
小山 壽太郎 掛川 長平
小山 正非
輕井澤 町 小川 武夫 土屋 敦
村山 一郎 中村 榮一郎
大里 村 萩原 雅 饗場 利司
柳邊 村 三岡 憲一
塩川 政巳 塩川 保
北御牧 村 赤尾 今朝太郎 渡邊 三郎
芦田 村 山浦 政公
北大井 村 | 美濃 清治
岩村 町 清 井出 欽一
木内 清
五郎兵衛 新田 村
伊藤 叔三
本牧 村 兩澤 平八 武重 孝一
協和 村
佐藤 多美雄 佐藤 喜美三
横島 村 柳澤 三郎
小沼 村 佐藤 基浩 高橋 忠敬
内堀 千秋
三都 和村
市川 唯茂
春日 村 竹花 喜一郎 平賀 英三
櫻井 國平
【南佐久郡】
野澤 町 柳田 清
白田 町 田島 正實 川村 吾藏
大澤 村 木内 俊一郎
櫻井 村 櫻井 彌一郎
【埴科郡】
南條 村 山崎 一郎 室賀 千秋
竹内 信次
山口 定次郎
戸倉 町 吉池 進 四方 浩
坂井 修一
坂城 町 市川 清雄 塚田 彦衛
鈴木 甚四郎 柳澤 榮藏 塚田 信敏
香掛 久藏 |
|---|---|---|---|--|--|

- ◆五加村 宮入雄吾 宮入正章
- ◆屋代町 瀧澤昌信 花岡郁哉
- ◆【更級郡】
- ◆村上村 小林信次 原實之助
- ◆大井 廣志
- ◆稻荷山町 清水元之助 菅谷保之
- ◆高村 平八
- ◆更級村 水井武雄 西澤美孝
- ◆上山田村 若林佐太郎 山崎親善
- ◆田島吉五郎 田崎一路
- ◆若林 正春 佐竹盛富
- ◆石村 勝已
- ◆八幡村 太田朝太郎 宮川禮次郎
- ◆松田 千里
- ◆【長野】
- ◆西澤 圭 大塚貞麿
- ◆竹重 信次 赤尾文次郎
- ◆兄玉 貞雄 小林根根夫
- ◆福詰 英作 小泉亮一郎
- ◆福井 清作
- ◆【松本】
- ◆金井嘉佐太郎 山崎林次
- ◆中野源三郎
- ◆【諏訪】
- ◆翠川 磐 茅野和
- ◆【東京】
- ◆石塚 揆一 瀧澤勝人
- ◆宮入傳兵衛 宮入清四郎
- ◆瀧澤四二 勝俣稔
- ◆片山 毅 五島慶太
- ◆中村 毅 稻垣征夫
- ◆山浦 貫一 倉澤剛
- ◆石森 直人 和田齊

- 大森 頼雄 小林 運美
- 小見山榮一
- ◆【横濱】
- ◆馬場 左 石川 等
- ◆山邊 優 大池 昇
- ◆馬場 武
- ◆【千葉】
- ◆高橋 信美
- ◆【名古屋】
- ◆小川 昌三 金子 貞男
- ◆馬場三子男
- ◆【京都】
- ◆大澤 忍雄
- ◆【大阪】
- ◆布施 信良 宮澤 佳治
- ◆上原精一郎 伊藤 中二
- ◆【神戸】
- ◆安藤 明 宮下 忠雄

歳末吟

15回 塚田 菁紀

現實のこのひろがりの悲しさのわれのみならず今年の逝くか
敗戦の國に悲しく生き合へるわれらに疎く今年の逝くか
かすかなる光をだに戀へ生活の示標も分かず今年の逝くか
失ひし心あはれめどもよみがへるたときも知らに今年の逝くか
信ずべきもの一つなはかなる思ひのままに今年の逝くか
わが目的かき索しつとよまずらくしてはやも今年の逝くか



支部便り

東京支部

一度は灰燼に歸し生氣を失つた東京も、終戦後三度

目の秋の訪れと共に次第に復興しはじめて來ました。長い間活動を待望されていた東京支部も、母校復興運動と共に軌道に乗り、再建へ確立へと歩みはじめました。全卒業生の六分の一以上もいる東京支部こそ是非母校の大きな支柱であらしめ、又故郷を離れて活躍している我々お互の「オアシス」といふものである。此の胎へ數ヶ月を振り返

えり今後の発展のブター！としよう。
十月三日、小泉清見、竹内敬太郎先生上京され大先輩を訪問し、母校復興につき援助を懇請する。更に上田郷友會同席に出席され復興援助につき懇談する。宮入清四郎先輩宅に東京支部を置き、積極的運動を十一月より行ふ事に決す。兩先生更に横濱へ赴かる。
十一月六日、北島校長、林貞三副會長、竹内敬太郎先生上京され、宮入先輩宅に有志會同し具体的方針を協議す。發起より在京先輩に招請状を發する事に決す。大森先輩の御厚意に依り色々都合して頂き五十名近くの住所の確實なる先輩に取り敢えず通知する。
十一月二十二日、二時より覽衆會館に於て始めて第一回の復興運動に關する世話人会を開く。母校より齋藤先生上京され諸事連絡あり、宮入先輩議長となり種々協議する。會する同窓左の如し。
松尾春重(7)、田中辰之助(10)、宮入清四郎(10)、和田齊(21)、大森頼雄(23)、兎東龍雄(23)、出浦七郎(23)、栗原正義(25)、市川準一(25)、渡野文雄(28)、大森松夫(30)、土屋三三男(33)、村上修紀雄(33)、小林郷司(40)、小島謙四郎(42)。
東京先輩中毎回二名宛發起人を選び、第二回打合會を一月中旬開く事に決まる。又上級學校在學中の先輩のみの集りを十二月中に開き

大に活動を期する事になる。向上中支部の結成が強く要望されつゝある事に鑑み、復興運動と共に支部結成運動を始める事になり、先づ名簿の完成を母校と連絡して行ふ事に決す。
十二月六日、上田郷友會總會の席をかりて更に懇請する。宮入、田中、大森先輩出席す。席上すでに六口の申込あり、更に住所の判明せるものあり、着々軌道にのりはじめた。從來まで運動費が特志先輩の負擔になつて、基金を作るべく「標準曆」を賣り利益を之に充てる。永井重弘君(東大理化、42)大に活躍し若干の基金を得。
十二月十三日、上級學校在學中の同窓のみの會合を田中先輩の好意により護國寺月光殿に二時より開く。校長先生、宮入先輩、田中先輩出席する。出席者次の如し。
中會根五郎(東大法)、白倉高(慶大經)、大井澄雄(東大農)、橋本仁茂(東大理)、永井重弘(東大理)、小島謙四郎(早大文)、柳澤宗一(早大商)、横山十四男(東大理)、矢島房利(東高商)、工藤忠房(慶大經)、小宮山一衛(慶大經)。
先輩間の連絡も積極的に行ふ事になり、來春を期して現役學生のみの集合を持ちも相互に連絡を密にする事多休には母校に於て四、五年生の進路希望者と懇談會を開く事に決す。
以上、極々簡単ながら

横濱支部

昭和二十二年十一月十一日、母校より北島校長先生竹内先生來濱(横濱生糸検査所)上中同窓會横濱支部設立に鋭意準備をなし、最寄同窓生に通信す。住所不明のため返信半數を數う。
十一月二十七日再び北島校長先生來所。支部設立發會式を横濱生糸検査所にて開催、校舍復興と新制高校設立の趣旨を説明せらる。一同責任額を釐出することへ賛成す。
偕而以前華かなりし會員も、戰爭中津々浦々に轉居し、其間死亡、戰傷死して激減し、殊に住所不明者多數を數う。且現下經濟狀態、住宅問題等入問らしき生活を營み難きにもかゝらず、長年此の地に住みなれし同窓集い來り、今後は出來得る限り多數の會員を招請することと申合せ閉會す。當日出席者次の如し。
北島校長、山邊優、大池登、清水保徳、長井盛至、塚原興人、太田正治、荻野喜次、坂田隆雄、馬場武、田口喜一郎。(26回、田口喜一郎)
◆【丸子町支部】
戰爭のため中止していた丸子町上中同窓會を昨年十月三日公園内楽館で開催した。
母校の火災復興に協力する打合せと、會員工藤壯馬氏の町長就任祝賀とを兼ねた久しぶりの懇親會なのである。母校からは校長、同窓會長等が見え、出火の状況及び復興計畫等について詳細な説明があり、一同母校の現況に對して一層の認識を深め、丸子町同窓會の今後在り方につき各自活潑な意見の交換を行い、左記により暫く運籌することに決め、和氣談々裡に散會した。
會長、四方沐、副會長、伊藤十一郎、齋藤寅太郎、幹事、清水忠義、翠川廣一、工藤芳夫、小林啓輝、綿貫正司、小林有郷、瀧澤篤、川合久。(19回、齋藤寅太郎)
傍陽村では終戦に依つて上出身者多數歸郷したので、松澤、安田兩氏の肝入で傍陽上中會を作り、その創立總會を昭和廿一年六月九日金繩寺で舉行了。集る會員四十二名、會則の議決、役員の選舉後、懇親會を開き大に氣焔を擧げ、

母校上中との連絡、傍陽再建に努力する事を誓つた。爾來會員は本村行政の中樞となり本村發展に貢献する多なるものがある。主なる行事を擧げれば

一、昭和第一周年紀念講演會、昭和十一年九月五日小學校堂に於て、講師、終戰時内閣書記官長迫水久常氏。

「最後の御前會議と終戰時の真相」に就いて。母校上中より高見澤敬頭以下八名の先生臨席さる。

二、農村經濟講習會、昭和十二年二月廿三日、實相院に於て、講師、上田織維專門學校教授、小泉所氏

三、春季總會、昭和十二年三月卅日、小學校に於て母校より宮坂軍太郎、竹内敬太郎兩先生臨席。

四、哲學講習會、昭和十二年四月十九廿日兩日、實相院に於て、講師、上田中學教授、西川先生。

五、秋季總會、昭和十二年九月廿六日、實相院に於て、母校より北島校長、竹内宮崎先生臨席、特に北島校長の母校復興に對する熱烈なる決意に一同多大の感銘を受く。

六、講演會、同日午後、小學校に於て

講師 東京毎日新聞政治部長 新名丈夫氏

同 同 經濟部長 名取嬢之助氏

七、卒業生對在校中學校生、昭和十二年十一月卅日、小學校グラウンドに於て十二對十にて卒業生勝つ。

八、若手卒業生と在校生との懇談會、在校生の進學就職其の他の指導に就いて第四十四回以降の若手卒業生と在校生との懇談會を行ふ。第一回、昭和廿一年七月十四日、實相院に於て坂口村長(第十八回)、本會役員出席、第二回、昭和廿二年五月廿四日、實相院に於て、柄澤村長、橋詰收入役(廿八回)本會役員出席

特に三井會長よりは在校生全員に大判ノート、野球ボールを給與して在校生を激勵す。

傍陽上中會則

第一條 本會ハ傍陽上中會ト稱ス

第二條 本會ハ傍陽村出身者居住者ノ上田中學校卒業生並ニ在校生ヲ以テ組織シ、卒業生部、在校生部ヲ置ク

第三條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ温メ、母校上中トノ連絡並ニ本村再建ニ貢獻スルヲ以テノ目的トナス

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長一名、專任幹事一名、幹事五名

第五條 會長ハ會務ヲ統理シ、副會長ハ會長ヲ輔佐シ、專任幹事ハ庶務會計ヲ司リ、幹事ハ當該部落會員ノ事務ヲ司ル

第六條 役員ハ總會ニ於テ選舉シ、任期ハ二ケ年トス

第七條 定期總會ハ二年一回春秋之ヲ開キ、臨時總會

講習會、講演會、體育會等ハ、ノ都度開催ス、右ノ開催ハ役員會ニテ定ム

第八條 本會ノ經費ハ左記ヲ以テ之ニ充ツ、入會金拾圓、一般會費、必要ノ都度徵集ス、篤志寄附金

第九條 本會ノ事務所ハ當分ノ間、專任幹事宅ニ置ク

以上、昭和二十一年六月九日創立總會ニ於テ決定ス

傍陽上中會役員

會長、三井英一郎(第十回) 副會長、半田東平(第廿八回) 專任幹事、安田清四郎(第九回)

(15回、三井英一郎)

小縣豐殿支部

昨廿二年八月末、兩村在住同窓約十五名、豐殿小學校に會合、母校より北島校長及び竹内教官出張せられ復興計畫の説明に續いて寄附金匯出方依頼あり、一同之を了承した。

この機會に豐殿支部結成の提唱あり、世話人を指名したが、本年一月六日午後右と同じ場所に於て發會式を舉行し、金子行徳氏を支部長に推し、久保田正三常任幹事となる。

支部會員は同窓約百名を主体とし、豐殿中、小學校職員中の同窓も之に加わり又在村の中途退學者も希望に應じて支部會員とする事にした。

支部結成の目的は母校本部との連絡の強化にあることは勿論であるが、尙村出身の在學生の指導にも協力するほか、村民一般の教育並びに文化振興の推進的活動の主体たるべきことをも申合せた。



學園だより

一、早稻田大學の巻

遠く故郷を離れた厳しい都會の生活にあつて、常に私達の心によみがえり來るものは、中學生活を追憶しての母校への愛であり、郷土への執着であります。民族はそこに一貫せる血の流れをもつて團結統一をなし得る如く、單なる地理的環境の同列よりも更に強いものは、學理想を一にせる一連の結合であり、同じ母校に育つた先輩後輩の團結であります。我々の學園に於て、若し夫々の所屬學部専

門部、學院、と例えるならば、一「稻門」會は、私達上中出身の早大生にとつてまさに慈愛深き母であつてまじしやう。嚴肅な學の道の中にあつて、幼き頃中學時代を語り、母校を懐しみながら、先輩の道行を聞きながらの抱負を論じ得るのには實に私達の稻門上中會のふくよかな雰囲気の中に於てあります。

今日は大きな誇をもつて此の稻門上中會について少しく御紹介したいと思ひます。それは早稻田學園を覗く一つの窓でもあります。

稻門上中會は自由の鐘おらかに鳴る早稻田の森に、理想を同じうし、母校を一生にする上中出身の早大在學生を會員とし、その先輩及關係者を會友とする、上中と早稻田とを繋ぐ一連の結合であり、更に千曲稻門會(上田を中心とし輕井澤より屋代附近に及ぶ早大出身者の會)に連る鎖の一環でもあります。母校上中との連絡を計ると共に、會員相互の親睦、學生生活の向上發展と本大學建學の教旨を全うすることを以てその目的としてゐます。會長には上中出身理工學部教授理學博士小泉四郎先生を推し第ニ早高(獨乙語、哲學)櫻山欽四郎先生、同じく(英語)今西基茂先生、更に日本女子大教授、早大講師(政經)市村今朝藏先生以上上中出身)を有し、現役在學生三十有餘名をもつて活潑なる運動を展開して

ます。最近の一・二の事例を擧げて會の模様を推察して頂くことにしましょう。

一昨春秋、早大演劇班「藝術座」を母校上中に招聘し講堂に於て演劇北(歸る)を上演、昨年五月同じく「ともだち座」音楽班「ハワイアンバンド」を招聘し上田市公會堂に於て「ドモエの死」及び「戀愛病患者」を上演、多大な文化的收穫をおさめました。昨年夏、上田市營球場並に小諸商業校庭に於ての稻門三田野球戰の開催に際しては、上田三田會と協力し、内外の後援に努力しました。東京に於ては、春の新人生歡迎會秋の例會を催し、前記諸先輩生並に二、三の先輩來賓をも合せて、さゝやかながら楽しい團樂を得ました。昨年、四月及九月には別所、戸倉に於て、夫々千曲稻門會の諸先輩と共に盛大な卒業生送別會が開かれました。又先日(慶大、東大、文理大の諸君等と母校を訪ね、講堂に於て、在校同窓生諸君と學園紹介の講演懇談會をしたことは私達にとつて喜ばしいことでした。

一寸思ひついたものを拾つただけでも仲々活潑な動きを見ています。すでしうたきをして實によく頑和された團結の固い會であることが伺われるでしょう。在校同窓生諸君が受験に來られても、入學されても決して不安な思ひにかられたり、ホームシックにかゝつたりする様な事はありません。何時

會員動靜

○甲田作衛氏(一回) 甲田同窓會長は復興委員會長として母校復興に盡瘁され居りましたが昨多御病氣のため、中鹽田御自宅に於て静養中とございます。

○金井章次氏(四回) 滿洲國の遼瀋役で蒙蔽政府の最高顧問をして居りました。同氏は最近下道の自宅で手紡糸と手袖の普及作製に専念され、農家の副業に貢獻されて居ります。

○山浦貴一氏(一回) 讀賣新聞客員として政治方面を擔當し第一線にて活躍中

○和田齊氏(20回) 東京朝日新聞東亞部長。講和會議を前にして奮闘して居られます。

でも會員の連絡はとれ、語り合ひ勵まし合う先輩は常に近く居ります。若し試験のこと宿舎のこと、生活費學費アルバイト、その他不安な事がありましたらどしどし會員の所に連絡して下さい。試験は三月十五日から始まるので、頑張つてやり抜いて下さい。そしてこの春は多數の喜びに満ちた諸君の紅顔を、大隈銅像の下に自由の塔の下に見せて下さい。「秋玲瓏の空響きて」と共に「都の西北」を共に歌う日を心から待つています。母校の發展と在校同窓諸君の御奮闘をお祈り致します。(早大商學部三年42回柳澤宗一)

林運英氏(24回)氏は少壯代議士として、院内總務部對策委員長、農林委員、労働委員を兼務し上中同窓會東京支部の仕事にも積極的に力を入れている。

○松山篤氏(25回)昨春激戦の縣選に出馬見事當選の榮を得た同氏は、愈々手腕を發揮し縣會常任委員、會教育部委員、農林省農機具配給諮問委員として活躍している。

○關口康雄氏(24回)同窓會功氏の後をうけて上田市會副議長の要職に就いた氏は山積している市政の處理にその力量を喝望されて居ります。

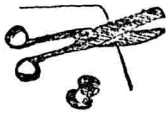
○小林巴根夫氏(23回)長野縣民政部長小林巴根夫氏は初代労働部長の要職を兼務された。

○田邊正氏(22回)(舊姓荻原)氏は長野選出局長として來長されました。

○故佐々木兵四郎先生、元本校校長の佐々木先生は昨年十二月十二日、東京都杉並區高圓寺四ノ六一九の自宅に於て御逝去されました。謹んで哀悼の意を捧げます。

○故島田三郎先生、元本校地歴科を擔當して居られました先生が御逝去なされました。謹んで弔意を申し上げます。御遺族は葛飾區金町二ノ二二六島田一氏でございます。

○故井上功太郎氏、(18回)大陸に於て活躍された氏は終戦歸郷後は、同窓會評議員復興委員上中クラブ委員長等郷黨後輩の誘掖指導に御盡力下さつて居りましたが、去る二月二十日忽焉として有爲の身を惜しまれつゝ御逝去なされました。謹んで哀悼の意を捧げます。



ニュース・フラッシュ第一輯

○第二回學藝祭十一月廿二日より三日間、秋空の下盛大に舉行、五年井澤君「學藝祭の歌」歌詞一等賞選。校友會活動の集大成と豪華な饗宴、新しき傳統は育ちゆく。

○「松尾ヶ丘の一日」映畫成る。映畫班の企畫構成

により母校一日の活動がフィルムに収まる。

○水泳球金澤に咲く。全國民体育大會に中等水泳會のホープ五年池田君縣下代表として自由型にリレーに善戰、テニスの宮崎、廣中君全國第三位獲得。

○四十二年の勤続卒業生の駒じみ深い公仕鈴木輔治さん老齡を以て孫々として勤められる。尊敬と感謝。

○かわい、個人展。二年早川君洋畫個展をひらく、個性の伸張と道への努力。

○復興へのけなげな一助。塩尻村、塩川村、城下校外内花市の街頭に立ち復興資金を募集、室賀村、傍陽村、和利校外團にもそれ〴〵之に準ずる美舉あり。

○創意と工夫の結實。五年安川君昭和二十一年度長野縣學徒研究發明創意展覽會に於て、知事賞授與、斜角測定器の發明！

支部の状況

駒馬の如く驅使された五年と夢遊病者の如く虚脱した二年を経て漸く最近では自覺を取りもどしたものは、依然混沌とした慌ただしい眼まぐるしい社會に處してやゝもすれば目標を失い、不安に陥り、失意に嘆くことある。此の様な時こそ、に話し會ふ友が欲しくなり、力となり合う友が望ましくなる。とりわけ遠慮も心置きもいらぬ竹馬の友、苦樂を共にした中學時代の友が懐かしくなる。こんな心が持たず火災後の復興問題とが絡んで各地に地方支部の結果が促進されて、以前からの立命會や横濱支部等をはじめとして、新たに長野、傍陽、丸子、鹽尻、長、鹽殿、上田市西部等殆んど各町村に及び遠くは東京に至る迄支部の復活或は新設が企てられ舊情を温め、懇親を圖かつて居ります。

東京支部は勝俣松氏が千曲寮再興に御盡力なさつて居るので、宮内清四郎氏宅(北區、中里町四二一)に事務所を置き、小林運英、和田齊、大森頼樹、村上悠紀等の諸氏の贈入で宮内氏宅、鹽水會館、増上寺等に準備會を開きその都度同窓會、學校より北島校長、材副會長、齋藤、久保田竹内の幹事が出席支部總會の準備を打合せた。

又嘗て華かたつ大横濱支部は山邊優、大池昇等の諸氏が戦争中離散した會員に呼び掛け復た活動開催して母校復興打合せと舊情を温めた。支部事務所横濱市中區北中通五丁目日生系検査所大池昇方。長野に於ては西澤圭、小林巴根夫等の諸先輩が長野、上水内方面を一丸として支部を作り最近に於て總會を開きたいと息まいて居る。(事務所は縣衛生課赤尾文次郎宛)

又地方に於ては傍陽村に於て上中同窓會の支部が、村内文化の推進体となり再三に亘り講演會を催すとか在校の後輩を激勵する會合とか有益な會を開いている。又浦里村では總會に金井章次、小泉清氏の兩先輩に講演を聴き、丸子、鹽尻、鹽殿上田市西部等では母校々長を招いて復興狀況、學制改革等を聴き、又若返えつて中學時代の話に昔を偲んだ。

その他、上中クラブ、庭球、蹴球等各部の後援會が組織され母校の後援援助に献身的な協力を致し、柔和會も亦活潑な運動を續けて居ります。

此の様に上中同窓會も漸く活氣を帯びて参りました。がどうか此の會を強いて行く爲には、各々を開拓して行く武器ともなし、驍勇者にも力強い伴侶ともなしに慈々御發展あらんことを切望いたします。

尚例年總會を四月三日神武天皇祭に催して居ります。お出掛け下さい。(29回竹内敬太郎)

鈴木さんを慰勞しましょう



公仕(小使) 同窓の皆様 訓染深い 鈴木輔治



編輯あとがき

老は、母校勤績實に四十三、その間再三表彰もされ、た實直勤勉な名公仕さんでありました。今度老年の故を以て退職を申出しました。學校では老の長年の努力に報いる爲、慰勞金を贈ることにになりましたが同窓會も皆様の御芳志を取りまとめて贈呈致したいと思ひます。應分の御協力を御願ひ申し上げます。

會報發刊は同窓會として多年の懸案でありましたところ、去る一月二十二日の幹事會に於て議決を見、早速編輯に着手し、二月一杯には是非刊行しようと思ひました。四月を期し母校が新制高等學校として發足するこの輝かしい秋に當つて會報第一號を諸兄の御手許に御送り出しますことは大きな快びであります。發刊に際し同窓諸兄の熱心なる御協力を賜りましたこと、又各方面の御援助に對しましても厚く御禮を申し上げます。編輯係は、まことに素人でございますが、只焦りながら結局諸兄の御期待に副い御厚志に報いるに足る何一つも出来なかつた事をお詫びしなければなりません。玉稿の中、紙面の都合上、次號に引續き掲載させて頂く様な向もございませうが思ひからず御了承下さい。時局から發行の繼續には幾多の困難が伴うことと思われまふ。どうか物心兩面に於て倍舊の御支援を賜り度く御願ひ致します。

編輯及び事業方法等に就いて諸兄の忌憚なき御批判と御意見とを頂く事が出来れば幸甚です。今のところ學期毎發行し、尚記事につきましては、酸金芳名簿と支部便り、會員動靜、學園便り等は號を逐い繼續してゆく予定です。どうぞ母校宛に各種會合其の他關係記事を隨時御寄せ下さるよう御願ひ致します。

全校擧げて復興の事業に邁進して居ります時、會報編輯は會員名簿作成と共に同窓會として當面の大きな事業でありますから、わたくし達は諸兄の御協力を得て微力を盡す覚悟で居ります。會報のすこやかな成長を念じつゝ、三・二・二三追記 母校も四月から新制高等學校として出發します。この會報名稱も次號から改めたいと存じます。諸兄御案考の名稱を御知らせ下さい。

發刊が段々遅れましてすみません。校門の寫眞版が間に合いませんので、やむを得ず古城の寫眞を代入致しました。松尾ヶ丘の追憶のよすがにもなれば幸いです。

